

陽だまりに父がいた。

築四十年の古い民家の縁側にどっしりと腰を落ち着かせ、猫背の背中をさらに丸めて爪を切っている。ぱちん……ぱちん……音は二人だけの空間を小さく揺らす。時折、かすかな夏風に誘われて吊るされた風鈴が優しい音色を奏でる。ガラス製のものよりも力強く澄んだその音はどこか懐かしく耳に残る。今朝、三年ぶりに帰郷した駅のホームで聴いたときは思わず涙が出そうになった。

おかえり……と囁かれているみたいで。

私は膝を抱え込んで階段の一番下の段に座りながら、黙々と爪を切ってはだんまりを決め込んでいる年老いた背中を見つめている。ゆらり、ゆらり、と太陽の光が部屋に忍び込んでは波打つ。裏の林からは蝉たちの生きている証を残すかのような叫び声。心地よい夏日に溶け込んで父を視界に宿していたまぶたが一瞬閉じて、慌てて身体を起こしたら階段からドスン——と落ちた。

怪訝そうに大きな背中が振り返る。

あ……はは。尻餅をついた格好で曖昧に声だけで笑ってみせると父は丁寧に新聞紙をたんで腰を上げ庭へと歩き出してしまった。黒ぶち眼鏡の奥からは何も読み取れない。怒らせたかな——そんな焦燥感。

重たい腰を上げ、さつきまで父がいた縁側に立ってみる。耳の横を風鈴の藍短冊がひらひらと音色とともに踊っていた。松をモチーフにした南部鉄器製のこの風鈴はもう随分昔からここにあった。夏が終わっても誰も片付けようとしないので冬にはずっしりとした冷たさをまとってここに居続けていた。それは私がいなくなつてからの三年間も変わっていなかったみたいだ。

縁側からまっすぐに庭を見渡すと楓の木の下に父を発見した。屈んで池から何かを取り出している様子がうかがえる。水が石段に流れ落ちる瞬間の音がとても気持ちいい。きらきらと粒になって輝く水面を脳裏に描く。父が冷やしていたものは一体なんだろう。

「……おい」

立ち上がり、こちらを向いた父の野太い声が私を呼ぶ。にこりもしない父親のそのぶつきら棒な言い方は相変わらずで可笑しくなってしまう。自然と口元が緩む。

「べっし座れや」

言われるままに腰を下ろす。

草履をつっかけこちらへ歩いて来る父の両手には淡い緑に色づいたりんごが握られていた。ほら、と首で促して父は私の手にりんごをひとつ乗せた。充分な時間をかけて全体にまで冷やされたりんごは小さな氷の置物みたいだった。幾つもの雫たちがその滑らかな身体を流れ落ちては私の両手に水溜りを作り出す。

「夏緑」

隣に座りながらぼそつと呟く。なにそれ。そんな顔で横を向くと、日に焼けたその指でりんごを指した。

「いい名前だね」

今の季節にぴったりだ。

「んだべ」

黒ぶち眼鏡の奥から一気に光が溢れる。大きな口でニッと父が笑う。今日初めての笑顔だ。

「仕事は……なんじよしてる？」

表情からふっと灯りが隠され、視線をこちらからまっすぐ前へとずらす。つられて私も下を向く。

……りんりーん……りーん……

緩やかな風が吹いては鉄鈴とじゃれ合い、その音色は一瞬一瞬の間を少しだけ埋めてくれる。そして、だんだんとか細くなって小波のような蟬時雨へと消えていく。

仕事はうまくいつているか——実家に帰れば必ず聞かれるだろう……そう思っていたから仕事に慣れてそれなりに成果を出せるまでは絶対に帰らないと心に決めていた。誰かに似て、私は妙に頑固だった。

就職をするとき——父や母が反対していることは痛いほどわかっていた。だから言い合いにもなつたし、逃げるようにこの村も出た。

——大学で学んだことをなぜ活かさない——父はそう怒鳴った。看護学部を出て国家試験も受けたのになぜ今さら雑貨屋なんかやりたいのか、と。

多くの怒りや憤りに触れて心はギシギシと軋んでいた。あの頃の私は自分の行く末を決める場所に立ちながら、父や母を説得するだけの言葉を探せずにいた。確固たる気持ちはあったはずなのに……ちゃんと向き合おうと思うまでに三年も経ってしまった。

「今度さあ……」

両手にすっぽりと納まったりんごに視線を送りながら口を開く。隣で父は一瞬だけこちらを向いて、再び前方に顔を動かす。

「外国に研修に行くの。あ、今はね、その雑貨屋の店長やってて……うちの店はヨーロッパの雑貨を主に置いているから研修はそっちの方になるんだけど……」

ちらり、と横を盗み見る。父、反応なし。

「……最初はね、やっぱり嫌なこともあったし辞めたいって思った時期もあったんだ」

きゅきゅつ。水に濡れたりんごを指でこするようにいじる。光の中でその淡い緑は完成したばかりのガラス細工のように輝く。こんな置物、仕入れてお店に置きたいなあ……なんて思う。ディスプレイはどんな感じがいいだろう。

「んで、なんだ」

しかめっ面で父がこちらを向いて一瞬、戸惑う。また、喧嘩になってしまうだろうか。

「辞めてえと思って、お前なんで続けてんだ」

黒ぶち眼鏡の奥の目は厳しくて、でも温かな色が滲んで見える。彼の気持ちの断層を一枚一枚めくっていったら……私に差し伸べられた和解の手はあるのだろうか。

りんごの先っぽをつまんで自分たちの間の板に乗せる。やや傾き始めた日差しに照らされて夏緑の鮮やかさが溢れていく。緑黄色の球体に薄く引かれた紅い縞模様はまるで夏の夕日のよう。

「ひとつひとつの置物を陳列させていくことが不思議と楽しかったの。それぞれの個性を活かしながらどう配置するか、どう工夫したらお客さんの目にあったかく止まるんだろう——そんなことを考えながら仕事をしてる」

父は何も返さない。お互いの間には流れる風と夏の匂い。そして、娘が帰ることを知って何時間も前から丁寧に冷やしてくれていた夏りんご——それはなんだか私たちが親子である証のように甘酸っぱい。

「お店に来てくれた誰かの手がひとつの雑貨に触れる、その瞬間が一番嬉しくて心地いいの。作られて命を与えられたものだから。手と手を通して誰かの幸せに結びついていくこの職業が私は大好き」

ああ……やっと言葉を紡いで届けられた。心からほっとし、笑顔が零れる。頭上で、りりりん——と鈴の音。余韻はなだらかな尾をひいて天高く昇っていく。夏の空はどこまでも青く果てしない。

……シャリ。

隣で何かが弾ける音。酸っぱくて甘い果汁の香り。

「頑固な親父と頑固な娘は」

大きな口でりんごに齧り付きながら父はこちらを見つめる。

「向き合うのに、ずいぶん時間がかかるもんだな」

だっはっはぁ。昔のように、豪快に父は笑った。つられて私も微笑む。今朝、緊張しながら恐る恐る玄関のドアを開けた私はもうどこかへ行ってしまった。父からはちゃんと私宛に手が差し伸べられていたから。心の断層の一番下はとても温かかった。

「したら、ぺっこ散歩にでも行くか」

父が立ち上がる。床に飾られたままのりんごを手にとって、サンダルを履き、猫背の背中に従って外へ踏み出した。

家を出て、振り返ると後ろには高く美しい夏の岩手山。家の周りは田んぼや畑が広がる黄緑色の海。そして深い深い森の濃い緑がこの土地を見守っている。草が揺れ、花が咲き、ここで生きるものたちの息吹が創り出したこの世界。ここは、私の帰るべき場所で故郷そのものだと生まれて初めてそう実感した。

「ああ……」

呟いて、前を歩いていた父が急に立ち止まる。そして、言い忘れていたとこちらへ向き直った。私も足を止め、父と正面から向き合う。そこには、頬を緩ませ目には優しい光を宿した父の姿があった。背中を撫でる風の気配。

「おかえり」

ゆつくりと、でも確かに言葉は胸に届けられた。瞬間、突然の強い風に揺さぶられて縁側の風鈴が高い響きを伝えた。

……りりりーん、りりーん……

風にくるくると回る短冊と電車を降りた瞬間の田舎の匂い。今朝、三年ぶりに着いた盛岡駅のホーム。おかえりと言っているかのような、その音色に切なくなったことを思い出した。この村を出るときは一人だったから。いつてらっしやいも何も言葉をもらえなかったから。決心して降り立ったホームで聞いた風鈴と夏色に輝いた村の緑に出会ったときは嬉しかった。今は、何より父の一言と思いやり——それが身体中を幸福な想いでいっぱいにしていく。

そうして、目と目をしっかりと合わせて微笑む。両手にはまだかすかに冷たい夏緑。呼吸を整え口を開く。どうかこの言葉が新しい何かを生みますように。ここからまた頑張れま

すように。

「ただいま」